

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 5 月 3 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370281

研究課題名(和文) イギリス文学における国家意識構築と宗教的主題の関連研究

研究課題名(英文) Research on the relationship between the construction of national consciousness and the religious subject in English Literature

研究代表者

園井 千音 (Sono, Chine)

大分大学・理工学部・教授

研究者番号：70295286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はイギリス文学における宗教的主題とイギリス国家意識構築の影響関係について社会的歴史的に分析し、イギリス文学の特質について明らかにすることを目的とする。イギリスの社会と文化は17世紀以降の近代化の複雑な過程で、一定の国民及び国家意識を構築し、今日にそれを継承している。この過程において文学の宗教的主題は公共的性質をもち重要な役割を果たす。本課題においてはイギリス文学における宗教的主題とイギリス国家意識の本質が不可分であることを基礎に研究を進め、イギリス文学の公共的特質を明らかにし、さらに18世紀以降のヨーロッパ社会におけるイギリス文学の独自性を思想的に検証することを目的とする。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the specific nature of English literature by analysing the influential relationship between the religious subject of literature and the construction of national consciousness of British people. The social structure and culture in English society have contributed to forging a certain notion of the British nation and the national community in the process of modernization since the seventeenth century. In this process, the field of humanities plays a significant role to form the national minds. Particularly, the religious theme of English Literature is important as its public nature has influenced the English nation's minds. In this topic, I am going to elucidate the public nature of English literature by examining the inseparable correlation between the religious theme of literature and the complexion of national consciousness. Furthermore, I will explore the unique nature of English literature in European societies by analysing the theological aspect.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 国家意識 ロマン派 西洋思想 ダーウィン

### 1. 研究開始当初の背景

これまでの研究において、イギリス文学における道徳的ないし宗教的主題は、例えば、17世紀のアンドルー・マーズ、ドライデン、ミルトン等の政治的宗教的作品において、国家批評、あるいは教育的意味において国民意識を構築する効果を与えたこと、また18世紀末から19世紀初頭にかけてのロマン主義時代において、危機的な政治的場面、例えば、共和主義思想の失敗、国家主義の台頭との関連において露呈する理想主義的理念の矛盾と葛藤を解決しようとするものとして存在することが証明された。このようなイギリス文学における伝統的主題には、19世紀以降のイギリス社会における哲学的、社会的思想の複雑化、ダーウィニズム等の科学理論による衝撃、経済的理論の発展、いわゆるコミュニティの体制的变化等、近代化に伴う諸要因による国民意識の動揺を反映する局面も指摘し得る。また、この特徴に加え宗教的思想を複合する文化概念（あるいはその復活）が国民意識の共通する性質を示すことも明らかになった。これらの変容は、この時期のヨーロッパ諸国における思想的傾向、例えば、特にフランス革命以後、理想主義的観念を体現する社会改革を継続発展するフランス社会などにおける国家意識の変容とは異なり、宗教的哲学的及び社会的要素を含む国民意識とその思想文化の形成という点において独自の公共的性質として理解することができる。特にイギリスの国家意識における宗教的性質は、国民意識形成においてその影響力の変遷はあれ、常に中心的役割を果たすことが明らかである。以上の分析から、イギリス国家意識とイギリス文学の関係において、文学の宗教的主題が、いわば共通項として国民意識の基盤に影響を与え、またその公共的性質として表出することが明らかになった。このイギリス文学の公共的性質と国家意識形成の影響関係についての定義とイギリス文学における伝統的主題の方向性をより明確にするために、本研究ではイギリス国家意識形成においてイギリス文学の宗教的主題が構築的役割を果たすことを認識し得る18世紀後半以降19世紀までのイギリス文学を中心に以上のテーゼをさらに綿密に検証する必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究においては、これまでの研究をさらに深め、イギリス文学の宗教的主題と国家意識形成の関連を、18世紀以降19世紀までの文学的記述と社会思想的文脈において考察し、さらにヨーロッパ近代社会におけるイギリス国家意識の構築過程とその本質及びイギリス文学における宗教的主題との影響関係を解明する。具体的には、18世紀文学においては、宗教的要素と国家意識形成の複雑な相克が特に明らかなロマン主義文学を中心に検証する。例えば、ロマン主義文学（コー

ルリッジ、サウジーなど）において、ロマン主義思想の基本的な非国教主義的性質と国家意識との複雑な関連、対ヨーロッパ諸国との政治的軋轢と国家主義台頭に典型的に見られるイギリス社会の思想的特質を、文学的記述と歴史的思想的資料分析を通して検証し、18世紀後半から19世紀にかけての近代イギリス社会における思想の特徴が宗教的主題の影響に加え社会的政治的要素を含むイギリス国家意識の基盤を形成したことを総合的に検証する。また特にイギリス国民意識の基盤に存在する国教主義（アングリカニズム）とカトリシズムあるいは福音主義との三者間の相克が、19世紀初頭にかけてイギリス国内外の社会的変革とともに顕在化する過程を分析する。

イギリス国家意識の性質は19世紀イギリス文学においてその宗教的主題との関連においてさらに重層化し複雑になる。19世紀イギリス文学（ジョージ・エリオット、マシュー・アーノルド、テニスン等）における文学的記述と宗教的懐疑思想の関連、ダーウィニズムを中心とする進化学理論等と伝統的宗教思想との関係等に見られる国家意識の特徴については、時代の宗教的、思想的、社会的、政治的資料の分析において明らかにされねばならない。同時に、文学における宗教的道徳的主題とイギリス国民意識がいかに構築的関係を示すか、またイギリス国民意識の近代的変革における国教主義思想の役割についての検証も必要である。

本研究の特色は、以上のように、イギリス文学と文化形成の関係の正確な意味を明らかにするために、文学における社会的、哲学的、特に宗教的主題の連関を学際的な視点において分析することであり、本研究により今日のヨーロッパ近代社会におけるイギリス文学と文化概念の特殊な性質に関する見解を提起することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は次の3つの課題を中心に行う

(1) 18世紀イギリス文学の宗教的主題と社会的政治的変革の関連における国家意識形成の傾向を検証するため、特に社会的変革と国家意識形成またそれに関連する宗教的思想の影響関係が顕著であったロマン主義時代を中心に検証する。ロマン主義文学における基本的な非国教主義思想とアングリカニズムの相克またその宗教的思想とイギリス国家意識形成との関連を、宗教的資料、政治的社会的資料、哲学的思想を中心に分析し、18世紀イギリス文学の文学的主題の宗教的性質とイギリス国家概念形成との関連を検証する。

(2) 19世紀イギリス文学においては、特に文学的主題とイギリス国民意識との関連を科学また社会思想変革と宗教思想の影響関係、またイギリス国家意識形成と対ヨーロッパ諸国との政治的軋轢と国家領域競争等

の状況を分析し、イギリス国家意識の思想的特質を検証する。この検証を踏まえ、19世紀末の文学的状況分析と宗教的懐疑の解釈及びイギリス国家意識の再評価と方向性を明らかにする。

(3)(1)(2)の研究成果を総合的に分析し、20世紀イギリス文学における宗教的主題の揺れ、またイギリス社会思想におけるコンセンサスの性質についての検証の方向性について考察する。具体的には、世紀末以来の宗教的懐疑の主題の変容を、ハーディー以降、ジョージ王朝詩から戦争詩、また1960年代フィリップ・ラーキンを中心とする20世紀後半文学における不可知論(agnosticism)との関連において分析し、将来的な研究方向性を確認する。

#### 4. 研究成果

(1)総論：通常、文学も、他の芸術的、哲学的、社会的その他の人間精神の発現様式と同様、時代と社会の影響を受けて生まれ、あるいは時代と社会に影響を与える。本課題では、特に英文学におけるこの性質に注目し、かつ、英文学が時代や社会精神を反映するという側面より、むしろポジティブにそれらに影響を与える役割を果たしてきたことについてその特質を分析した。

今回はその働きがイギリスの国民性もしくはは国民意識の形成に寄与したとする認識に立ちその本質を検証した。特に18世紀から19世紀にかけてのイギリス文学の文学的主題と国民意識の影響関係において検証し、さらに20世紀イギリス文学における主題とイギリス文化の概念との関連についての発展的検証の方向性について確認した。

本研究はイギリス文学の文学的主題がイギリス国民意識に与えた影響を歴史的に系統的に検証するという意味においては国内外においても未踏のアプローチであり、イギリスにおける学会においてはイギリス国民性の成り立ちについての共時的かつ通時的分析という点で評価された。

具体的には、18世紀後半から19世紀前半までのイギリスロマン派文学における検証においては、いわゆるロマン主義文学第一期当時の社会的動乱、即ち、フランス共和主義思想の失敗、国家主義の台頭が一方にあり、他方、理想主義的理念の修正、矛盾、葛藤等が文学的主題として表現されるが、同時にイギリスの主題である自然、風景への回帰が読者のパトスに働きかけ、その働きがいわば人間と社会を再生させる力であり、道徳的意味であることを作品がメッセージとして示唆していることがわかった。

さらに分析的に要約すれば、イギリス文学は、例えば17世紀におけるような国家の混乱や不安、危機的状況、人々の精神的動揺や懐疑心等を、文学が内包する主題として意識し、それを作品の読者に対するメッセージとして示唆する。言い換えれば、この態度には、

ある種の道徳的構築力が文学の公共的主题として伝えられ、それらが総合的に国民及び国家意識形成に関連する機能を果たしていることを理解することができる。

イギリス文学におけるこのような伝統的主题は、19世紀以降の経済的発展、社会理論、科学的考察の深まり、ダーウィニズムの意味の探求、世紀末思想等を背景に、多様化というよりむしろ一時的には消滅したかに見え、文学はその公共的性質の変容を経験する。価値観や倫理観が相対化し、例えばディケンズにおけるように善悪の問題が文学的主题となるなどもその一例である。読者の共感も同様ではない。19世紀末以降20世紀初頭文学は世紀末思想の影響も強く、伝統的主题に対する懐疑との葛藤は基本的にはペシミズムとして表現され、文学の力も衰退するようになる。確かにこの状況では、文学は時代世相の局面と同様、積極的ないし肯定的示唆を示すとは言い難い。しかし例えばハーディーの詩作は20世紀文学の将来を予期させる近代的性質を示し、20世紀初頭のイギリス文学がモダニズム文学に押される中で、伝統的な公共的性質を内包したことは重要である。この点においては次の研究課題としてより発展研究する予定である。本課題におけるロマン派及び19世紀イギリス文学分析は主に研究代表者が行い、19世紀イギリス社会における科学的コンテクストの分析は主に平田耕一研究分担者が行った。また19世紀から20世紀イギリス文学の思想的コンテクスト解釈については園井英秀研究分担者の研究協力を得てすすめた。

イギリス文学の文学的主题と国民意識の関連について16世紀から20世紀までのイギリス演劇、詩、小説の分野における検証の一例を福岡女学院大学杉本美穂氏、同志社大学金谷益道氏の研究協力においてサー・フィリップ・シドニー、シェイクスピア、ロマン派文学、フォスター、キップリング、コンラッドの作品を中心にシンポジウムにおいて発表した。

本研究の結果を踏まえ、イギリス国民意識の特徴である自由思想、懐疑主義、寛容の精神などが顕著になった1650年代から1770年代までの文学における道徳的主题と国民意識形成との関連について発展研究する予定だ。

(2)ロマン派文学とイギリス国民意識関係についての検証：例えば、特にイギリスロマン主義文学の1790年代から1820年代にかけての詩作が、イギリス国内の共和主義思想の盛衰、フランス革命との関係、対フランス戦争などの社会的政治的変動との関連において、それぞれの詩人の表現には主張の濃淡や立場の違いが見られるにせよ、社会の改革とは、人間の自由とは、守るべき価値とは、等の主題について、ある共通する認識と価値観がある。それは、一つの見方においては、文学が時代と社会の産物であるというより、

むしろ読者の国民意識ないしは国家意識に働きかける道徳的役割を持つともいえることを検証した。これらの見方について、ワーズワース、コールリッジ、サウジーの作品を中心に考察した。

1790年代から1820年代にかけてイギリス国内においてはジョン・ロックやルソーなどを中心とするヨーロッパ啓蒙思想の発展とその影響とともに人間の根本的な自由、平等、生命に対する権利を保障する重要性に対する公共的コンセンサスを得ることができた時代である。それは工場労働者、女性、奴隷貿易廃止運動、非国教徒の権利拡張運動などの社会改革運動における人々の基本的権利に対する欲求の盛り上がりにより明らかである。ロマン派詩人のイギリス国内における社会改革運動に対する積極的関与やフランス革命のスローガンに対する共感はその文学的思潮が人間の精神の解放と自由の権利の重要性を彼らが認識することを示す。ロマン派詩における自然状態にある人間、人間と自然の密接な関係の強調は同時にイギリス国民に共通して理解されるものと考えられる。人間の最終的に帰る先としての自然の存在の主題はイギリス文学の通時的な特徴の一つでもあり、それは特に18世紀末から19世紀初頭にかけての国家的危機、社会的変革の時代においてイギリス国民の精神形成の基盤となるものを形成したといえる。

このことについては研究代表者がイギリス及び国内における学会および論文において発表した。

(2) 科学発展と国民意識の関係：本研究は平田耕一研究分担者が主に行った。特にチャールズ・ダーウィン『種の起源』出版とその背景にあるイギリス社会事情について宗教的思想的資料により検証した。自然神学との関連においてウィリアム・ペイリーとの関連においてダーウィンの科学思想との影響関係について考察した。地質学との関連において、地質学と宗教との関連を考察した。イギリス地質学原理とダーウィンの影響関係において分析し、ダーウィンの科学思想と宗教的性質の複雑な関係が明確になった。科学方法論とダーウィンの科学思想の関係をヒューウェル、ハーシェル、J.S.ミルの帰納主義的方法論との関係において検証した。宗教的テーマと科学思想の関連について、ブリッジウォーター論集、ロバート・チェンバース『痕跡』出版とダーウィン『種の起源』出版との関連を分析した。イギリス社会においては宗教思想と科学発展はキリスト教義を否定することなく、緩やかに社会発展と共に共存したことを検証した。その中において、『種の起源』出版後の「進化」思想が思想的近代化と共にイギリス国民意識に受容されていたことがわかった。具体的にはヘンリー・ドラモンド、ベンジャミン・キッド、アーサー・ジェイムズ・バルフォアの進化思想

関連の著作の出版数とその売れ行き分析により、イギリス社会において進化思想が流布した経緯を分析した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

園井 千音、平田 耕一、「『種の起源』出版後の19世紀イギリス及びアメリカ社会における進化思想の流布について」、(『大分大学工学部研究報告』、64号、2017、pp.1-8.) 査読無。

(<http://hdl.handle.net/10559/16337>)

園井 千音、「英文学における公共的性質とイギリス社会の関係—文学とイギリス国民意識との関連」、(『日本英文学会第88回大会 proceedings』、2016、pp.304-305.) 査読有。

Chine Sonoi, “From *Wat Tyler* to *A Vision of Judgement*—The sincerity of Southey’s liberal sensibility from the 1790s to the 1820s”, (*The Coleiridge Bulletin*, Nether Stowey, UK, New Series 46, 2015, pp.51-57.), 査読有。

[学会発表](計 2件)

園井 千音、「英文学の公共的性質：文学と国民意識との関連」、日本英文学会第68回九州支部大会シンポジウム、2015年10月24日、佐賀大学本庄キャンパス、佐賀市。

Chine Sonoi, “From *Wat Tyler* to *A Vision of Judgement*—Southey’s ‘sincerity’ of his liberal sensibility through the period of 1790s to 1820s”, *Robert Southey and the Bristol Poets*, 2016年7月15日, M Shed, Bristol, UK.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

園井 千音 (SONOI, Chine)

大分大学・理工学部・教授

研究者番号：70295286

### (2) 研究分担者

園井 英秀 (SONOI, Eishu)

九州大学・人文科学研究院・名誉教授

研究者番号：00060709

平田 耕一 (HIRATA, Koichi)

九州工業大学・大学院情報工学研究院・教授

研究者番号：20274558